

# 〈マラーネ〉ゲルハルトの赤い舌

——堀田善衛「祖国喪失」からの問いかけ——

大 橋 毅 彦

## 一 上海のユダヤ難民と日本文学者

第二次世界大戦勃発前後、ナチズムの脅威を逃れるためにヨーロッパ各地で暮らしていた多くのユダヤ人が亡命を余儀なくされ、うち約二万を数える人々が避難地として選んだ上海、——この地における亡命ユダヤ人との邂逅が日本近代文学にもたらした衝撃度を測定することは、〈一国文学史〉の枠組みを越えていく議論が活発さを増している今日の視点から判断して重要な課題だと言える。

周知のことに属するかもしれないが、ユダヤ人避難民が上海に滞留したほぼ十年にわたる期間は、第二次上海事変から太平洋戦争開戦直後の租界進駐を経て、この都市に対する日本の支配力が強まっ過ぎていきもすれば、戦局の推移に従ってそれが表面的なものであったにすぎず、日本の上海統治政策・統治機構の混乱や弱体化が露呈してくる時期にもあたっている。そして、この時期上海に渡り、あるいは立ち寄り、そうした歴史的状况に巻き込まれな

からユダヤ人との間に接点を持つに至った日本文学者の存在も、改めて探すとすると結構見出せるのである。

たとえば小説家石上玄一郎の場合。一九四二年一〇月号の「中央公論」誌上に発表した「精神病学教室」で当局から厭戦主義者として睨まれた石上が、中日文化協会上海分会に職を得て日本を脱出したのは一九四四年四月だったが、以後日本の敗戦によって内地に引き揚げるまで、この軍国主義の檻の中に入れられることを厭う壮年文学者は、その一年前に日本軍が上海の楊樹浦地区に設置した無国籍避難民隔離区（通称上海ゲットー）に足繁く通い、ユダヤ難民の生活にじかに触れる機会を持った。その折の体験は、やがて『彷徨えるユダヤ人』（人文書院、一九七四年一〇月）の中でふり返られることになるだろう。

あるいは詩人草野心平のとった行動。汪兆銘政権の宣伝部顧問として、この時期南京・上海・北京・東京の間を往き来し、第三回大東亜文学者大会の実施に向けて主導的な役割を果たしていくことになる草野もまた、この街で出会ったドイツ系ユダヤ人版画

家D・L・プロッホと共著の形で、一九四二年一月に、彼の友人名取洋之助が軍から委託されて経営していた太平洋出版印刷公司から「黄包車」と題した詩画集を刊行した。それに載った亡命ユダヤ人芸術家の版画と、上海を支配下に置く日本からやってきた詩人の文章との関係は、戦争下における芸術の自律性をめぐってさまざまな興味深い問題を提起している。<sup>1)</sup>

他ではどうか。昭和一六（一九四一）年上半期の第一三回芥川賞受賞作である多田裕計「長江デルタ」（大陸往来）一九四二年三月）には、第二次上海事変の戦禍を受けた上海のイーストエンドに忽然と姿を現した「ユダヤの悲しい楽園」の光景が取り込まれている。そして、その場所が前述のとおり避難民隔離区となつてからは、第三回大東亜文学者大会が開催される南京に向かう直前の高見順が詩人の池田克己に連れられて訪れている。同じ場所を終戦直後には、一九四四年に中国に渡つて戦場のスケッチやプロパガンダを目的とする壁画制作に携わるなどした島崎翁助が、かつてのベルリン時代に見知っていたマルタと名乗る女性と再会し交渉を持つようになる。その島崎をモデルとする画家を短篇小説「蝮のすゑ」に登場させており、彼もまた石上玄一郎に遅れること二ヶ月余りで中日文化協会上海分会とつながりのある東方文化編訳館に勤めるため滬した武田泰淳も、戦後まもなく発表した「女の国籍」（小説新潮）一九五一年一〇月号）の中に、主人公の「混血」性や「雑種」性を強調するための触媒としてユダヤ人の存在を盛り込んだ。池田克己とともに上海文学研究会の会員だった小泉譲のこの時期の小説にも、ユダヤ流民に取材したものがあられるらしい。<sup>2)</sup>

これらの文学者達の上海亡命ユダヤ人との出会いの諸相は、むろん個々にみえていけばそれぞれの色合いがある。すべてがまったく同じ方向を向いている、同一の傾向を持つていられるとはけつて言えないはずである。

ただ、そのような視線を送るのとは別に、戦時下上海において〈ユダヤ人〉という存在を直接的に知り得た彼らの体験が、フォイヒトヴァンガー原作、谷譲次訳「猶太人ジユス」（中央公論社、一九三〇年八月）のような翻訳を通じたり、石川淳の長編「白描」（長篇文庫）一九三九年三月六月、八月九月）のように、外国への開口部となつていった神戸が産み出した「おそろしい異邦人」の血を引く混血の娘の日本との絶縁の物語という形をとるなどして形成されていったそれ以前のユダヤ人イメージを、どのように相対化していったかを考察することもできると思う。上海でユダヤ人との交渉のあつた作家が見るものは、現実のユダヤ人とは没交渉であつた時・場の中でイメージされていくものと比べてどのように変わったのか、あるいはどのように変わらなかつたのか。

さらにまた、彼らの到着以前から様々な民族が寄り集う場所として、文化の雑居的乃至無国籍の相貌をその著しい特色として発達を遂げてきた上海に、ユダヤ避難民がどういう新たな局面をもたらしていったのかという問題も、その存在を取り込んだ文学的言説を通して把握していくこともできよう。すでに上海を亡命地として選んだ民族としてはいわゆる白系ロシア人の存在があつたし、ナシヨナル・アイデンティティーの喪失や曖昧化によつてこそ上海の街では生きられることを証明していった者の中には、

「マヌエラ」や「コンスタンチン・マキシモヴィッチ・コンドルロフ」という名前をこの都市で通用させていった日本人の存在もあった。<sup>(3)</sup> こうした文化的雑居の布地にユダヤ人という存在はどんな新しい生地と色合いをもって織り込まれていったのか。

戦時上海における亡命ユダヤ人との邂逅が日本近代文学にもたらした衝撃度を測るとは、これらの問いかけに対する解答を過不足なく見出すことであり、それを限られた紙幅の中で行うとするならば、以上の問題領域を凝縮して示していると判断される一つのテクストを優先的に組上にのせねばなるまい。私はこの先、その名をまだ出してこなかった「祖国喪失」という小説を取り上げ、とりわけそこに登場するユダヤ人宝石商ゲルハルトがもたらす衝撃波を追うことにする。小説の作者は堀田善衛、一九四五年三月に国際文化振興会上海資料室での職に就くために同地に渡り、終戦後中国国民党宣伝部への留用体験を経て日本へ引き揚げるまで一年一〇ヶ月余りを上海で過ごした。その間、武田泰淳や石上玄一郎とも親しく交際した文学者である。

## 二 〈マラーネ〉ゲルハルト登場

堀田善衛の長篇小説「祖国喪失」は、日本に引き揚げてきた堀田が最初に発表した小説「波の下」(個性 一九四八年二月)を皮切りとして、以降「個性」「人間」「群像」「改造文芸」に独立して発表された作品が創作集「祖国喪失」(文芸春秋社、一九五二年五月)に収録される際に、この題名の下にまとめられたものである。

拙論の目的に沿う形で問題系を小説の冒頭から確かめようと

するならば、まずは〈祖国喪失〉というタイトルの持つ奥行きが探られねばならぬだろうし、次には冒頭の章「波の下」に登場してくる、この小説の主人公である日本人の杉と、軍属の夫が上海を離れている間に彼と「むずかしい関係」に入ってしまった公子とがそれぞれ示す難民的状况を、ユダヤ人避難民のそれになぞらえながら読み進めていくといった道筋が立てられよう。

しかしいまは、そうした方法をとらない。論の核心部に一気に迫るために長篇の構成から見て第四章にあたる部分で、日本がボツダム宣言を受諾した報が上海の街に流れた晩、杉や公子とも深い関わりを持つユダヤ人宝石商ゲルハルトが彼らの知り合いのモロゾフの店で奇禍に遭うまでの顛末が語られている、それ自体で優に独立した短篇としても読める「彷徨える猶太人」から入っていくことにする。<sup>(4)</sup>

「今日は夜中に嵐が来るそうだ」という言葉が人々の口の端に上る晩方、杉とともに「三輪車」<sup>セリネット</sup>に乗り合わせたゲルハルトは、何かものに憑かれたかのように自分が所与のものなど何一つ持ち得ていない人間であることを伝える言葉を吐きだしていく。曰く「尤も僕は、普通、人間が持っている苦のもののはじめから何一つ持たない」、曰く「僕は表面的には変幻自在、何時何をするかわからず、イデオロジーも一定の筋ももっていない」。

ゲルハルトのこうした否定的な自己定義は、自らの資産や仕事、思い出や誇りといったすべてのものをなくすことを要請されて故国を出て行かされ、現在はこの地にとどまっているがもはや帰るところもゆくところもないという、上海亡命ユダヤ人の存在

様態の全般的傾向を説明する上で、一つの有効な指標になつているとも言える。

だが、彼らの多くが自らにとつてかけがえないものを失つてきた痛みや疼きに苛まれているのにひきかえ、ゲルハルトの自己規定のありようはそういつた苦しみを苦しむことにはや慣れてしまつた、より暗いアナキーな雰囲気を漂わせるものとなつてゐる。この虚無や懐疑の集合名詞のような生のありようは、かつて自身が収監された「猶太人収容所」の「恐怖の部屋」での体験とともに、彼の出自が「マラーネ」であることに起因していると言えよう。ユダヤ人への迫害が苛烈さを増した一五世紀末のスペイン・ポルトガルにおいて強制的にキリスト教（カトリック）に改宗させられたユダヤ教徒とその末裔を、古いカステイリヤ語で「豚」を意味する言葉を用いて「マラーネ」（「マラーノ」と呼ぶ——こうした定義をほぼなぞるかのように、ゲルハルトは彼の祖先が「ポルトガル出身の猶太系オランダ人」で「猶太教から基督教に転じ」た者であることを明らかにしている。そして「豚だよ、僕らは。普通の人間が持つてゐる一義的なものが、何一つない。宗教がない、国がない。マラーネにはどんな範疇も適用できない」という否定的な自己定義を繰り返すのだ。

むろんマラーネと呼ばれる人々の中にも、キリスト教に改宗したとて、ユダヤの教えを棄てられなかつた者がいただろう。いや、むしろ表面的には十字架を拝しながらも、心の奥ではユダヤ教に帰依し続けることを生の必須の条件として受け継いできた者たちこそ、（マラーノの系譜）と呼ばれるべき存在であるかもしれない。

しかしながら、この小説に登場するゲルハルトには、そのような意味でのマラーノ性は与えられていない。彼の告白が際立たせていくものは、彼がユダヤ人であるがゆえに、ナチとそれに同調する者がいる場所では何度でも追放の憂き目に遭わなければならなく、それだからと言って正統派ユダヤ教の世界に安住の位置を求めてみても、そこにも彼が座るべき椅子は用意されていないという、帰属する場所の二重の意味での喪失感、二重の追放の烙印が彼の生には強固に貼りついている現実なのである。

こんなふうに一応特殊ともいえる彼の立場は、石上玄一郎『彷徨えるユダヤ人』に登場するユダヤ人青年イリヤとの対比によつても確かめられる。堀田の「彷徨える猶太人」の作中時間をほぼ一年ほどさかのぼつた現実の上海で石上の前に現れたこの青年が、「贖罪の日」（ヨム・キブル）に彼を一家の住む貧しい屋根裏部屋に招いて、ユダヤ民族の辿つた歴史の中で迫害にあつた同胞をしのぶとともに、キリスト教に強制的に改宗させられたマラーノが会衆として戻つてくることを呼びかける祈りも含んだ「コル・ニドライ」の曲をヴァイオリンで奏する時、彼の立ち位置は見えてこよう。「トローラー」や「タルムード」の教えを石上に説いて聞かせ、「もしユダヤ人がいなければ迫害者はユダヤ人をこさえるでしょうよ」といった。ユダヤ人問題の本質に触れていくような言葉を口にするイリヤ青年は、戦争が終わるとアメリカに行き、その後一家そろつてイスラエルに渡つた。

さらに、イリヤの家はいわゆる上海ゲットー内の舟山路のかたほとりにあり、その一方、堀田の小説に出てくる時計室石商ヘル

ン・ゲルハルトの店と自宅は、仏租界と共同租界の境界をなす福煦路近くと市の西部の愚園路にそれぞれある、ということの対照性。一九四三年二月に日本陸海軍最高司令官名で楊樹浦方面に指定された無国籍避難民隔離区に同年五月までに移住を強制された一万五〇〇〇人余りのユダヤ人避難民達の生活は、劣悪な環境や当局の監視の下で苦渋に満ちたものであったが、それでも自分たちの民族的誇りを捨て去るまいとする思いは、一九二七年以来この地にあつて摩西会堂とも呼ばれていたシナゴーク（ユダヤ教会）での集いやそれに近接する華徳路公園、百老匯大戲院でのユダヤ音楽や演劇の上演会という動きを生じさせた。こうしたコミュニティ意識、自分たちの民族的文化的伝統を守ろうとする精神が働いていた場所から、「そこには国際という架構」が「食いつきそくな容貌」を見せている街区で私財を蓄え、その当時実際には汪兆銘や周仏海らの〈漢奸〉<sup>(7)</sup> 政治的民族的アイデンティティーに対する背信者たちの私邸や連絡機関が置かれていたのと同じ地域にユダヤ人の妻を住まわせているゲルハルトは遊離してしまつてゐる。

けれども、問題はもう一巡めぐつてさらなる問いを發して行く。つまり「マラーネ」ゲルハルトを特別の位置に立たせていく楊樹浦のユダヤ人共同体それ自体が、はたして一枚岩的に結束したものであったと言い切れるのかという問題がそこにある。ポーランドのイエシバ（ユダヤ教の宗教学校）に学ぶ正統派ラビや学生たち、上海ゲットー設置時点では中立であつたソ連から流入していたロシア系ユダヤ難民、ドイツ国民としての証を得ようとした

が、結局はそこから追放されてきたユダヤ難民、これらの人々の間にも、ゲットーの支配者（日本）の外交政策上の方針の影響を受けたり、彼ら自身の文化的遺産と宗教的戒律の捉え方や外部からの支援金の調達ルートの違いなどによつて、さまざまな葛藤や紛糾が生じていた。マラーネの中に殉教者もいれば敵に媚びを売る者もいるように、こちら側にも真摯に生きる者もいれば、したたか者もあり、嫌われ者も出てくる。そして、この否定的な側面が強いられた結果のものであることも含めて、その生が多様で拡散した傾向を持つてしまうことがユダヤ人の存在のありようそのものだとするなら、ゲルハルトの告白中に出てくる、逃亡中のサイゴンで彼が仕出かした「ナチのテロリストと一緒」に「米国の石油タンクと領事館に爆弾を投げた」という「筋道の立たぬ」行為もまた、こうした傾向を極端に押し進めた結果現れた、政治、宗教、イデオロギーなど、どの点一つをとつてもそれを一つのまとまりとして扱うこと自体に意味がないと思わせる、ユダヤ人の分裂傾向を逆説的かつ象徴的に証明する指標なのである。

### 三 「黒い瞳」との葛藤—ゲルハルトの「赤い舌」—

「その点、モロゾフやイワノフ一家の方がまだしもかもしれないよ、彼らには正教の信仰とロシアの土の追憶がある。僕の故郷、ドイツは、猶太民族の土地ではない……。」——ユダヤ人ゲルハルトは、自分が帰属するところを持たず、その生の根が徹底的に断たれているさまを示すために、彼が上海で知り合った革命ソビエトから亡命してきたロシア人一家の存在を合わせ鏡とし

て持ち出している。

そういうえば、こうしたことをゲルハルトが話しはじめてほなく、彼と杉を乗せた三輪車は「露西亜人の多い霞飛路聖母院路角」を通り過ぎていた。フランス租界時代にアベニュー・ジョッフルとも呼ばれた霞飛路沿いは、一九一七年の十月革命で誕生したソビエト革命政權に追われて上海まで移動してきたロシア人（いわゆる白系ロシア人）が二〇年代以降集中して住みつき、三〇年代に入るとよりいつそうスラヴ的な雰囲気な濃くしていった地域である。そのことを当時この地域にあつたいくつかの店や建築物で確かめれば、ゲルハルトの店から霞飛路を西に向かい、聖母院路との交差点を越えたすぐのところには、ロシア人経営の有名な西洋料理店D D S 珈琲館があつたし、次に交わる邁爾西路のほとりにはロシアン・バレエの伝統を受けつぐ上海バレエ・リュスの活動拠点である蘭心大戲院（ライシヤム劇場）が建っている。そして二人が車を捨てた「霞飛路重留陪路」角の旧回力球場前からは、見ようとすれば独特の玉葱型の大ドームを戴いたロシア教会の塔屋が仰がれたにちがいない。

こうしたスラヴの民、なかんずく白系ロシア人の祖国への郷愁を掻きたてるものが溢れかえる場所ですら二人の登場人物は、彼らの到着を公子が待っているモロゾフのキャバレに入っていくのだが、そこに現れてくるものもまた、店主のモロゾフや彼が雇おうとしているズレイカ、アリオーシヤ姉弟とが、「亡命ロシア人の大切な財産」であるところの「黒い瞳」を歌いかつ弾くことよって、彼らの裡なる「民族意識とでも呼ばれるもの」を

「むくむく」と盛り上がらせていく光景なのである。革命後四年間にわたる逃亡の旅を続けた果てに上海に流れ着いた母親イワノヴナが霞飛路裏で営んでいたみずほらしいバアを、街の破落戸に乗っ取られてしまったために、「掻っ払い」や「淫売」をしなければならなくなったアリオーシヤとズレイカだが、「黒い瞳」さえやりはじめたなら彼らの胸は泡立ち、顔は美しく紅潮してくる。そして、アリオーシヤの弾き出すアコーデオンの高い顫音や低いバスは、すでに「楽器の音ではな」くなり、彼の「身うちからうち出されてく」る歌として、杉には聞きなされてゆくのだ。

このように「黒い瞳」という音楽は、上海に住む亡命ロシア人の身体に根付いている土地の記憶を蘇らせ、その生に晴れやかな瞬間をもたらしていくのだが、それと同じ構図は武田泰淳の短篇「秋の銅像」（『才子佳人』所収、東方書局、一九四七年一月）の中にも見出すことができる。武田泰淳の小説の舞台となっている「バルフロ」と呼ばれるジブシー酒場と、「祖国喪失」では「アンフェール・アンテルナシヨナル（国際地獄）」と杉たちが名づけたイワノヴナ一家の経営するバアとは、おそらくその当時の泰淳と堀田、そして石上玄一郎も含めた三人がよく通った同じ店を材源にしていると思われるが、さてその「バルフロ」にいるロシア人の女ゾルテも、店にやって来たブーシユキンかぶれの若い日本人文学者「Y」が発した、「ゾルテ、イゴールを歌え」という命令にたちまち応じて、「美しい声をはりあげて歌い出」す。その「実に立派な歌ぶり」は、それを聞いたもう一人のロシア女の眼を「急にキラキラ光」らせ、やがて薄汚れた狭い酒場一杯に、

古い毛布にくるまって寝ている老人を除く全員の、ゾルテに和した歌声が湧き起こっていくのである。

武田泰淳の小説も含めて、上海に流れてきた白系ロシア人の身内から「民族意識の根のようなものだけがぐっと露出」してくる場面を確かめたわけだが、このような世界に対して、合唱の最中ズレイカと眼を見合わせてうなずいた拍子に、「どうして」か「ちよっと口をあけ」て「赤い舌」を「ちらり」と見せた、そしてそれを目撃した杉をして「彼の暗い口の奥、腹の底には何が渦巻き、赤い舌はどんな根から生え出ているのであろう」と訝しがらせたゲルハルトは、はたしてどういった関わりを持つのか。

結論から言ってしまうと、この節の冒頭に引いた彼の言葉が指し示すように、その問いかけに応じることのできる、具体的に強靱な自身の〈根〉にあたるものをゲルハルトは提示し得ない。代わりにゲルハルトが自分とそれとの間に紐帯を見出すものはいくつか、母のたつた一つの遺品である「七宝の懐中時計」であり、この懐中時計をいじるゲルハルトの関心は、時計の蓋に刻み込まれた「十八世紀頃の華麗な衣裳をつけた婦人が扇をもってひっそりと腰掛け」た模様に向けられている。

この関心は時計のかつての所有者であり、拷問されたあげく死んでいった母に関する記憶を直接呼び醒ますものではない。むしろ、ゲルハルトは自分がその身をもって知ったわけではない、自分が覚えてはいないものについての思い出を作り上げていくようにしているかのように見える。帰るべきところも行くべきところもない生の空白を埋めるためにこうした遠回しの記憶を作り、「こ

の時計の模様のような幸福を考えて生き」ることは、そうやってでしか幸福をつかみえない、しかもそれは「抽象的な幸福」であり得ない、彼の生の絶望の深さを同時に示している。

しかも、ゲルハルトの内に胚胎するその種の絶望は、彼の周囲にいる者に確実に感染してゆき、その暗い陥穽に彼らを吸いこんでいくようだ。プロットの見てたぶんそこが、悽愴で悲惨な状況があるにしても、それが「イゴール」に夢中になれる者たちの善良で健康な魂のありようを浮き上がらせる地の役割を果たしている、「秋の銅像」とは違うところだ。すなわち、ズレイカ姉弟が「黒い瞳」に心を浮き立たせているまさにその時に、杉たちと入れ違いにモロゾフの店を立ち去っていたイワノフナは首を吊ったのである。若い頃歌手として名声を博した国にはついに戻れず、十字架もなく自殺したため、塗油式も受けられずにシーツの上に寝かされた彼女の屍は、「宗教も祖国も自分で創り出さない限りは僕らには存在しない」というゲルハルトの思いを一つの形として現している。そして、黒い唇と黄色い乱杭菌の間で「既に硬はつてい」たイワノフナの「思いがけず大きな舌」は、ゲルハルトの「ちらり」と見せた「赤い舌」からの連想で言うなら、彼女の〈根〉もついにそれに潤いを与え、養ってくれるものを得ないまま、枯渇して朽ち果てたことを象徴するものなのである。

#### 四 ゲルハルトの波紋

ゲルハルトの持つこうしたアナキーな奈落には、杉や公子も巻き込まれていく。

むろん、「祖国喪失」の冒頭から登場して、「確かな目的をもつた人」ばかりが集中する虹口から離れて暮らしており、潜水艦に撃沈された折に生まれたばかりの我が子を暗い波の下に奪われた公子がその時抱いた、「人間が波と見分けがつかない……?」(略)これは何のことだろうか? 人間と波は? という思いに象徴されるように、「当然なものとして通っている一切に対して、それは何か、という質問」が自身の裡で「極めて自然に放たれてしまう」のを始終感じている二人は、ゲルハルトの出現を待たずして己の思考や生活の支柱を喪失しつつあるわけであり、それだけを取り出すなら、この小説においては(「祖国喪失」という理念が先行しているがゆえに、個々の人物造型の掘り下げが徹底化されず、そこに登場するのはややもすれば祖国喪失者の群れとなつていゝる、という批判的観点も成立するかもしれない。

しかし、いま重視したいのは、たとえば小説の第二章にあたる「共犯者」において、スイス公使館裏の喫茶店で、杉と公子が「自分ぶつ壊すことばかりやって来」た彼らにとつて戸籍や国籍が邪魔になる時がすぐにでも来そうだなどと語り合っていると、そこに「無国籍の時計宝石商」ゲルハルトが初登場の形をとつて入つて来たり、黄包車に乗つた杉が、この上海という都会に「実直な人生」が根付いていくことの可能性を疑い、その証である「松の木の生えた海浜」といった心象風景や「三好達治の詩の断片」が「恐ろしい早さでどこかへ過ぎ去り退いてゆく」のを感じるとき、彼の眼の方は車上から見えるゲルハルトの宝石店を捕捉していたりすることである。これすなわち、ゲルハルトという存

在が二人の抱く自己同一性をめぐる不安定な感覚を映し出し、二人が試みようとする否定的な自己定義のありようをいっそう強固なものに育て上げる役割を果たしていることを表していないだろうか。小説の発端部「波の下」において、連れ立って歩く公子と町角で唇を合わせるたびに、「どういふものか『戦争と平和』という、途轍もない、接吻とはまるで無関係な言葉が頭の芯にばかりと浮び上るのを感じ」る杉の感覚は、ゲルハルトにとつては上海到着以前に経験済みのものであったし、「彷徨える猶太人」に続く「祖国喪失」の章においても、「ドイツを失つて『行くところがないとなつたら行かぬことに定める』信念」を得たゲルハルトにあやかるように、杉もまた「己が公子に与えうるものはなにか」という自問に対して、「そこには、ないというもののしかなかった」といふ答えを導き出しているのである。

このように見てきた時、ゲルハルトなる人物の位相は、堀田の上海滞留前後の日本人の言説活動が生んだ亡命ユダヤ人イメージを大きく踏み越えたものになっていゝると言えよう。上海大陸新報社発行の邦字新聞「大陸新報」紙上には、一九三九年一月の創刊時から四四年末までに少し目立った見出しを持つものだけでも五〇件近くのユダヤ避難民関連記事が掲載されているが、それらの多くは上海における(帝国)日本のプロパガンダに彼らを利用しようとしたり、彼らの存在をもって揶揄や侮蔑の対象としていゝうとする言説によつて埋められている。中にはそういうあからさまな暴力をふるうことなく、楊樹浦のユダヤ人街のたたずまいを哀愁に満ちた光景として歌い上げた詩もあるが、そこに見られる



彼らの生をエキゾティックなものとして取り上げていく書き手の感性それ自身が、局外者の位置に立った彼がユダヤ人を風物視していることを告げている。

だがゲルハルトの位置は違う。侮蔑や彼らを風物扱いする視線に射突められて他者との出会いの回路を塞がれてしまった同胞と違つて、彼の場合は同じ小説中に登場する杉や公子が、その生に牽引されていく対象として、自身の存在を主張している。

むろん、そうは言つても、ゲルハルトの「冷い特殊鋼のような灰色の顔」を、杉も公子も自分の顔の上にそのまま植え付けることができるわけではない。敗戦を契機として日本特有の「ねちっこい」論理に自分が乗り移られたことを知った公子は、そのまま「日本の嫁」になる道を選択したし、その後も上海に残り、「フライリップ」という名前でモロゾフの店のピアノ弾きとなつて暮らす杉にしても、そのようにして自己が解体していく生活と、そんな自分の前にすら国や社会がぐいぐいと迫ってくる生活とのほざまに立たされた苦痛それ自体の中に、最終的には自らの生のアイデンティティを見出していつているように思われる。

しかし、このように「影を失くした男」や「表情を失くした女」にはなつたが「金属的な謂わば零」にはなれなかつた男女にとつても——いやこういふ揺らぎのただ中に置かれた存在であればこそ、彼らにとつて——「国」つてもそのものに喰らいついてやる」というゲルハルトの言葉が重い意味を持つのは確かなことだ。彼のこの命がけの復讐の対象となる「国」とは、それを「持っている、属するところがあるというだけの自信」で、それを「持

たぬ者」から見たら「途轍もないグロテスクなこと」を平然と行う歴史を繰り返してきた、そして繰り返していくことが予想される社会集団のことである。そしてそのような人間の集まり、国のある思想に異を唱えるために、ゲルハルトはいかなる範疇にも属さぬ存在として生きることを選んだ。それは国のある思想から見れば怪物めいたものとして映るだろう。だが、本当の怪物とは何なのか。

それに頼らなければならぬところへ人間を追い込んでおきながら、結果的には彼（彼女）の生を根っこにしてゆく国家の非情さに匕首を突きつけたゲルハルトのポテンシャル・エネルギーは、戦時上海を舞台とする最近の小説では、たとえば林京子の「予定時間」（『群像』一九九八年六月号）の中に流れ込み、個人が国の美醜と一体化せねばならない酷薄な現実の中で自らの「性根」を探し続ける人生を送つた新聞記者の「私」や、「亡霊のように人を操る『国』」に立ち向かい、「国つて蚊柱のようなものね」と笑つて言いながらひっそりと死んでゆくリタという女性を生み出していつているように思われる。

そしてまた、「祖国喪失」の制作とより近接した時点で発表される、両作品の間にかなり具体的な対応関係が認められるものとしては、武田泰淳の短篇「女の国籍」（『小説新潮』一九五一年一〇月）であろう。中国人の父と日本人の母を持つがゆえに国と国との間をピンポン球のように投げ回され、「混血、雑種、売国」と呼ばれてきた女主人公が、そんな烙印を捺された自身の「怪物」性よりも、「人種とか民族とか国家とか」の鑄型をもつて人間を区別

する「鉄の殻」の方が不気味で非情であることを告発するところ  
でこの小説は終わっているが、この「鉄の殻」の怪物性をよりリ  
アルに伝えるために持ち出された「毛深い甲殻類の手脚の冷たさ  
が、ザラザラと肌に触れる」イメージが、「祖国喪失」において  
もやはりそれとよく似た「グロテスクな蟹か蠍」のイメージに託  
されて、あらゆるものが自明の形をとらぬ世界に落ち込んだ杉が  
自分自身の裡に見出す「抽象的な怪物」性と、そのようにして彼  
を平和な日常性から遠ざけていく力をふるう国や社会の怪物性を  
照らし出しているのである。

- 注(1) この点に関しては、拙稿「戦時下上海における亡命ユダヤ人と日  
本近代文学との出会い方―白緑黒刻・草野心平説明『黄包車』の場  
合―」(『甲南国文』第四九号、二〇〇二年三月)、「上海の提籃橋か  
らダツハウヘ―D・L・ブロッホの航跡を追いかけて―」(『千年紀  
文学』第五一号、二〇〇四年七月)を参照されたい。
- (2) 蘇我邦衛「文学挺身者の責務―上海文学『冬春作品』批評」(『大  
陸往来』一九四四年六月)中に、小泉がユダヤ流民達を好んで取材  
していることに言及した一節がある。
- (3) 前者はパークホテルのスカイテラスをはじめとするナイトクラブ  
のフロアレシオウダンサーとして活躍した和田妙子、後者は正統派口  
シアンパレエをこの街で広めた上海パレエ・リュースに参加した舞踏  
家小牧正英のことである。
- (4) これ以降の本論では『堀田善衛全集』第一巻(筑摩書房、一九九  
三年五月)収録のものを「祖国喪失」のテクストとして用いていく  
ことにする。
- (5) 「離散するユダヤ人」(岩波新書、一九九七年二月)・『マラーノの  
系譜』(みすず書房、一九九八年六月)・『十字架とダビデの星』(日  
本放送出版協会、一九九九年三月)などにまとめられた小岸昭の一  
連のマラーノ研究は、そのような立場からなされている。

- (6) 一九四三年七月三〇日、八月一日に行われた租界返還によって、  
フランス租界と共同租界はそれぞれ上海特別市第八区、第一区と行  
政的には改称されたが、ここでは小説の表記に従った。
- (7) 唐培吉等著『上海猶太人』(上海三聯書店、一九九二年八月)二  
二三・二四八ページ、饒立華『上海猶太紀事報』研究(新華出版  
社、二〇〇三年五月)二三四ページ、宋妍編『虹口記憶』1938  
~1945 猶太難民的生活(上海学林出版社、二〇〇五年八月)  
一二二ページなど参照。
- (8) 旧共同租界西側に広がる越界築路区を通る愚園路近辺は、一九三  
〇年代後半以降、瀟洒な住宅街のすぐそばに賭博場や阿片館が次々  
と建てられ、テロ事件も頻発、ために租界内の住人達からはパッド  
ランドとも呼ばれていたが、そういうグレイゾーンであればこそ、  
そこには「対日協力」側に立った中国人政治家の私邸や連絡機関も  
集中することになった。
- (9) ナチ占領下の対独協力者モーリス・サックスの場合も含めて、こ  
うしたユダヤ人に見られる多様性、拡散性を問題にするにあたって  
は、司会者古川一義、発言者ヘレナ・シロニー、小幡谷友二、菅  
野賢治による「座談会」ヘレナ・シロニー教授(エルサレム・ヘブ  
ライ大報)をお迎えして、フランス語表現のユダヤ人作家たち  
『人文学期』第三七七号、二〇〇六年三月)から様々な教示を得た。  
(10) 堀田善衛・開高健「対談」上海時代(『海』(武田泰淳追悼特集、  
一九七六年二月)参照。
- (11) 「彷徨える猶太人」に登場するゲルハルトは、「帰属するところが  
あると信じている人から見たら、気が狂ったのかもしれないが。一  
口で云えば、ナチなど何でもない、と思っってしまったのだ。とい  
うか、いや、もっと別のことを考えていたのだ。そう、人間というや  
つはいつでも何か別のことを考えているものだ」という言葉も口に  
している。
- (12) 前者の例としては「猶太奉公隊も颯起 打算を捨てて感謝の奉仕  
へ」(『九四四・九・一六』、後者の例としては「新上海のしみ」と  
いう連載物の最終回として掲載された「祖国なき娘は唄ふ 紅燈の  
蔭に淋し 絶望の歌」(『九四三・八・二二』)などが挙げられる。
- (13) 兼松信夫「詩一章」(『九四三・二・四』)